

小栗外傳二編

二

^ 13
3293
9



門 13
號 3293
卷 9

寒燈小栗外傳卷之八

東都

絳山戲編

本大學出版部

第十三編

處女佛堂小馬像を背戀と
貞婦浴室小良人再奇遇と

且説小栗判官代助重と藤沢寺の常阿上人の示すより。時運の至るを
待んとて三洲二村山とよ地方一困居して世の老景を窺ひたり。此亦三洲の
うちをて北は寄る邊鄙なる人の知るを少なれど又世のつりを知
ゆよ。即今主従斯令ひ居る人のいふに邊鄙なるも人小疑らむと
禍舟連舟を醸とあり且と敵の勅静を安に便なく。そのう大議を起
さんとし譜代の旧臣等が懸れ居るを招き身人小便悪とて主従評議を
定め十人の郎番れらち美登小を郎のをもとめおれ残る者を修驗者

順れ梵論傍様牽。説経師るんごお打せ鎌倉よかめて一色が解を設せ
まゝの舊國下下せ旧好のりのを蜜亦在めり。小栗の二村山
の林兼よかてそのの庵を営み美登小を訂と主従二人山水を友にして
居るのしがは下めの行少し財あり故糧あり事かともありるれど
巨万の富も居るがく食くがく形ひよて幾月を経やる時も乏く
なりぬ斯くもその后めの飢餓お迫りるん小今日とるをそのの生營
をせん主従相議とも武士の果を多鄙居る用なりりのあて解の
料を取らん其術もろく殆難及びり小栗世小栗一を其多の藝
品難びけるるる文武の道は化生質画とを好む其術は賢く古乃
金剛もたら勝はべき字力ありらるる武士のみとて術のあはれと
世小技露もせてありしと今急迫貧困の才となり不我の財を賣ん
よりのハと其の梅を画に宗丹といふ名を記。美堂小を即持。當國を
さうらり京までも賣りしり。其以雪舟とんと父をいひみき如きしり
足ととも世に行かれ其重をとりぬる主従はを粘るる尚
あまりなりけり。かくに此里おめでとるる農夫あり宿願のありて
美濃國寶光院の虚空藏に後馬を奉納せんと小栗かりて其
々は其某美濃國赤坂の虚空藏に後馬を奉らりやとて然あるに
画工一足下の當世に二るに社をいへる其某奉納する所の繪を
に画りしれしと頼とてその小栗今の業とて其枝るねの子細なく
語ひぬ彼人喜び一れをのて又ヤクは當國八指の里の古にりれ各所
あて世に知られりるるなれば在五中ね旅夜の歌流るる形を画れり
といふ小栗いと易れりよめと回意れば彼人よく喜ひ齊ら一する

繪馬を小栗の家よらめおれ。重具の料などゑをけ。暇をうらめり
 赤坂の宝光院へ送るを。納りては。然る小此。送馬勝れり。と
 先母のふ業平の容貌よく。小栗は似たり。され小栗を知るの。此送る
 を觀て。昔より。重工人物を。字せ。自ら。おのれ。容貌よく。似るの。ありと。さる
 が。此画の。よく。画人。は。似るの。うら。と。口。傾。く。ば。小栗。が。足。廉。の。生。質。世。小
 知。れ。たり。爾。は。は。娘。女。と。此。送。馬。を。觀。て。さ。ね。お。心。を。傾。け。る。も。多。う。り。
 且。説。美。濃。國。青。墓。の。宿。万。長。よ。一。人。の。女。兒。あり。たり。名。を。花。兒。と。呼。ぶ。り
 々。は。次。女。親。の。教。う。る。ふ。鄙。よ。似。げ。る。れ。美。女。あり。人。の。親。の。心。よ。醜。女。女。女。も
 人。の。子。れ。る。も。く。形。は。より。立。務。ま。て。え。ゆ。る。る。お。ま。の。正。く。數。さ。あ。ま。し。て。ん
 夫婦の心を竹取の翁が。おひを。掌中の壁障の華と。愛し。み。女。御。に。ま
 こ。そ。の。及。ぶ。ま。じ。あ。れ。官。祿。も。も。に。高。れ。公。達。さ。る。て。女。塔。と。い。せ。と。數。の
 宝。を。費。し。和。歌。を。竹。の。師。を。京。師。より。呼。込。只。願。す。の。業。を。の。み。字。ぶ。じ
 ち。り。先。陰。関。守。好。く。花。兒。今。年。二。八。の。妻。を。む。え。り。お。母。年。以。和。言。を。少。行
 女。才。を。委。の。は。る。勞。よ。も。心。ち。好。く。なる。寢。食。も。由。に。易。く。さ。る。は。父。母
 これ。を。驚。る。れ。医。療。多。く。お。ま。を。さ。し。し。れ。ど。さ。る。く。一。れ。論。も。入。り。と。衆。醫。師
 の。い。ふ。原。此。病。を。辨。氣。より。發。と。一。俄。に。茶。の。効。も。あ。る。は。し。心。靜。よ。醫。教。の
 狂。を。さ。せ。ば。自。ら。氣。も。解。藥。餌。の。力。も。驗。め。んと。流。論。さ。れて。實。さ。る。る。の
 も。あ。ら。ん。と。これ。より。夫婦。の。花。兒。が。心。の。ま。よ。く。遊。觀。の。こ。と。の。み。た。る。は。し
 ち。り。こ。の。に。昔。墓。と。赤。坂。との。間。お。金。生。山。宝。光。院。と。を。い。じ。れ。精。舎。有。り。本。寺。の
 と。虚空。菩薩。著。落。して。大。巖。の中。に。安置。し。も。係。靈。驗。附。彩。を。都。鄙。の
 老。若。千。里。を。も。遠。く。と。せ。と。お。を。運。ぶ。の。少。く。は。此。山。上。より。東方。を。眺望。せ。ば

藤之の里杵瀨川釜燈の里ると眼下ありて風色いそんさほし珠こころ

 多々ねがひりも三春の比の美詣のまことり。されば万長夫婦とひがふれ病あはれ

 ちとてらん中うと此虚空藏菩薩に祈をもり且と山色の佳景を遊あそび

 ぶく万長が妻小笹花見を俱しと宝光沈まま詣し御佛の寢殿まあやう

 ろる涙りを祈りまて。其後宝殿の四方を顧りて種々の珍馬を所披あき

 懸並ぶるうらふ彼小栗く重くは在五中ねの繪る勝遊てんえんねが花見あはれ

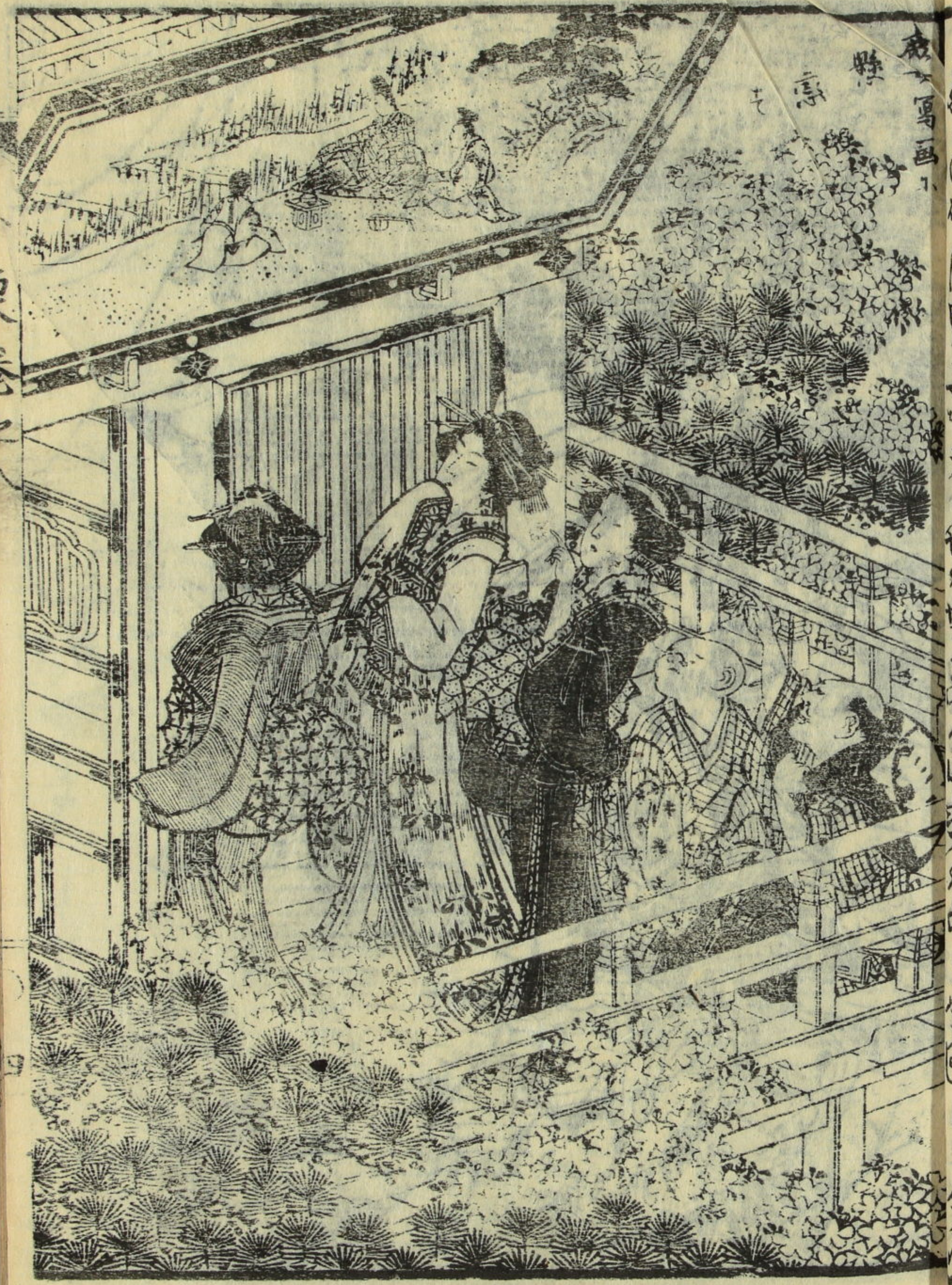
 あれも眼をとめ熟く着るく人物草木悉くその具をえるぬくまあはれ

 繪に写せしとら想われをそれの中にも在五中ねのまぬ生て言あはれ

 顔この欲する姿の都さうはゆ今世ふえり。すも及むがれ美あはれ

 かねが花見これよ公奔るはと養出の情頻めて心裡ま念あはれ

 うれりのかとは男子と夫とせば世よある甲斐のあひたるあはれ



小栗判官

三河木
を
撃ち
つ
て
一
切
を
樹
に



三河木

三河木

栗

花見

小世

五

世間小此君より似たる人の命を換て逢らん小世を隔くる甲斐あるまよ
とよしなれ思ひが折れに傍よ二人の漢子ありて物給さるる
は一人の云や此室殿の裡に掛る弦馬も君多れど在立中ねの八橋お
休めり字とれそいと愛とらみ下れ実美男の姿えある業平公の
斯くもおもとらん世の未よ至りて此君も似る人もほしとららわら
ければ二人の浄子足下いこの弦馬を字し重人を知らざればさし世の間を
とらるるよ某の此重人宗丹を知り字し後其人の貌をのりて
いしよりの云みよいしはるが宗丹が容貌この後馬の中お君もあつても似
たりと宗丹は烏帽子付衣をせしはしうが則この後その中おある
とよと入へられ前の漢子嘆息しさて今の世もかには深きものあり
はよ潘岳あも方ならぬくう我の男子ねがはれと丸を止めよと
は命をも厭へしと褒戯とく去らるる先見の此鏡話をうらやめ
さての写鏡のごとく男のなれ世の人と想ひしに正しく今世も有るはよ
ととらるるおを泳ぎたれ母の小笹の女児がのりてを知らぬ風色の美絶を
観きし爵を散させむやと召使しあつる下僕をしてとある花の下お鏡
を敷し幕をとりし齋しあつる楹を置き酒をとり歌舞を傳し先見
がゆをそのうととくと先見の宗丹のゆをのみとひ花をよれとわ
あま 後馬の中お人目おのりてささるる心と樂しきと爵として居らりけり此
南村西園三十三所の観音が順れととて道者の年が五十もあつる
ととらんとおはるるが前刺より山堂お休らひ居らるる先見が先見とらるる
をよとて同じく山堂をひり其邊を徘徊し処お又六尺おもはるるねととらるる
若く壯なる悪漢めきとらるる六七人足も花をえんとて此邊おのりてはを

伏流ふくりゅうと注居しよゐられ小母こはは我子わがこの身上みみづかを危あやむとひらうせんとを
 恨うらみまを折おくは深羅ふかろ登のぼり面おもてを蔽おほひ。研ひる馬うまうちをて世よ所ところをこ
 行ゆく侍さむらいめり。小母こははの幕まくらの裡うちより此人このひとをえ女おんな見みがまをり走り出い馬うまの響こゑお
 ろりどろどろ。えらけちもりて頼たのむはあつと目今いま母子おぼこ不あや圖ま危あや難な止と遭あ
 命いのちのほどもそ米こめなつらん。あそれ助たすけりれじと涙なみだとともは悔くあ
 杉すぎとまてゆれが彼人かのひと咳せき然しかとして。いまご回くわい意いあも及およびぬ射と悪漢あくかんホ一いち般ぱんお
 返かへひまりの有あきをもいりて抜ぬけまて馬うま上の上の人ひとを斬きるてか。ねが馬うま上の上の人ひと
 声こゑを揚あげ人ひとくさりののりまあひも我わ足あし下したホ何なにの仇あやの怨うらみと受うつるや。
 此この身みおえならぬのをも人ひと差さひじと志こころあひと制せいとれども魅まつらと我わく
 素すより汝なんぢをばえ。とねそれ仇あやもひし今いま世よ解とれ及およびぬ事こと響こゑよとづりし
 女おんなは命いのち惜おぼへん女おんなをよへよ我わ努なむとせむ目めお物ものをせんと聞きひあり
 馬うま上の上の人ひと微こ笑わらひ兎うさぎ鳥とり腹はらよけれ。獵あ夫おとこもこを殺ころすと。世よの流ながれもあ
 がゆ。目今いまこれある二人ふたりの女おんな性しやう縁えん故この知しらざれど身み命いのちに及および危あや難な止と
 意い入いり助たすけてよと云いうけれ。兩ふた刀た帯おびは身みのまひ。退ひく退ひく。退ひく。退ひく。此この場ばの
 勢いきさつ。汝なんぢホい。ま。做なとて。一いち回かいの援えんけほまをせし。かうか。手て柄えらは此この女おんな性しやうを。
 棄ある。あ。て。よ。よ。と。云いう。け。て。馬うま上の上の。人ひと。を。斬きる。て。二ふた人にんの。女おんな。を。彼かの。下した。に。せ。
 身みが。ま。う。は。して。ま。う。と。ま。ま。の。斬きる。人ひと。光あ景けい。と。悪あく漢かん。も。ハ。駭おどき。笑わらひ。一いち。斬きる。
 車くるまの。火ひ。を。消け。す。ホ。一いち。杯はいの。み。を。り。て。ま。う。と。ま。ま。に。い。ら。れ。ぬ。美み勢せう。た。ま。う。と。ま。ま。
 後のち悔くせ。ま。と。い。は。く。は。言こと罵ののしり。て。抜ぬ連れん。斬きる。て。か。ま。の。抜ぬ合あひ。ま。勢せう。と。相あい。手て
 小こ。う。と。入い。秘ひ術じゆつ。を。そ。戦いくさ。ひ。が。悪あく漢かん。ま。勢せう。あ。り。と。ら。ん。と。も。一いち。人ひと。の。人ひと。は。故こ
 から。深ふか。手て。解とれ。ま。勢せう。あ。り。ぬ。の。も。好この。く。渾ま。刀た。を。引ひ。く。還かへ。去さ。る。り。相あい。手て。な。ら。ぬ。と。ま。ま。

彼男刃を鞘に納りけり。汗もぬぐひ声を揚前の女性も人故に逃ぐはあ
 何方へも去る人我おも不用のゆて心の急がめきひてとたまうと
 去んとせぬが小笠敷子忍ひ居りし木陰を立出りやのふ勢射まら
 多く今日不料獨めて母子こころなれ憂同小達ゆめちの程も危あま
 むんこの深き恵ふより斯恙なく免と一恩を報りてさねべき。いつたが
 家の此よりして遠く程も隔らねば一まづはしめひ孫といひは
 面を合とせり。これそもいふ此人と陰馬小笠敷子業平小露も差りぬ
 教へせよ先見を想ふその人を不図して入るるれ夢幻とも并るこ
 なく。さうく胸をおくちるめ再生の恩を感謝して名をいふ小宣ふ
 といと勢同くれば其射彼人微笑て今日の事其力の及ぶ所
 あり。正しく當寺の井の助けめり。性名を各生えきあふまで
 宣ふ及ば。我又其報を受は公たすれ。性名を各生えきあふまで
 と。さぞ小辞し去んとせれば母子を控もあし。只願同く歌されむ。
 彼男も母子う志を感じ。さぞうの宣ふを各告ぬもれば其ころ三州
 二村山井住るは宗丹とす。そのあをゆと父より先見とすてのまは
 捨馬を字す。その人う。このあをゆと父より先見とすてのまは
 みぐれ君ゆゑと胸若下した折る。母の小笠敷子心を隔ちる程と
 宗丹をひきとめて云り。はあ。さて足下の三州は。さうと。此よ人の
 程も遠くさへ。今日と此邊小宿りを借る。さうと。さうらひ奴家と
 青蓮。往りぬ。今夜の家子ほり。われじと云は。誘引んと。此
 村前刺逃還りし奴婢の告めて主万長程もき。慌忙家内は奴僕を始
 目ごろ親しく出入を近辺の人を辱ひ妻子が危難を救へと目今

小栗卷之八

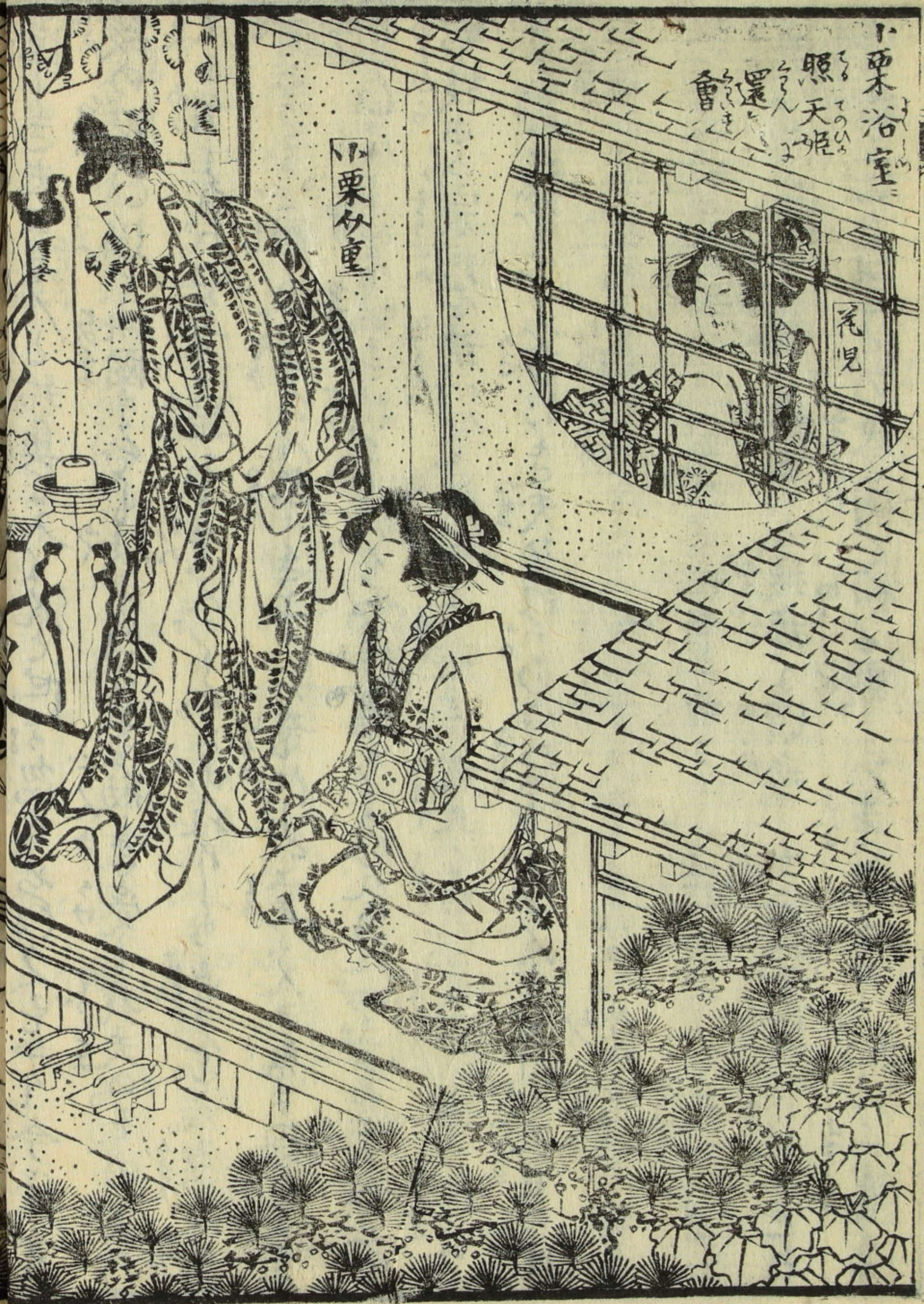
八

此地よ走馬を小岳を争ふもあれをよて好時と喜びて慌忙夫は
 呼と宗丹の力に由りて母子恙なきことをほたる有枝が事を洗沽
 万長かぎりおろきび宗丹が對ひ恭しく礼をのへ妻子が路をとりひつる
 感謝をのべてしければ妻子が再生の恩人のうへ此まゝ還しやうめん
 今夜の是非とも信ひまわらせ一杯の酒を遣なり九牛が一毛の恩を報
 まうさんと強よ誘ひておのの家路よ赴きなりそもく今日順礼を悪漢
 本と闘争その始万長が妻子よ及びりる足陣岡戸ホウ謀計めく
 花見が容貌の良麗をよて勾引き入るるりとそ順礼お拵打くる者
 と岡戸三田小栗もあてもありり且説小栗の万長は誘ひその意ふ
 至りしうら主万長前驅く家お走入り恩人の入らせりゆや誰と
 門お知りて近くは酒肴のすけせよと罵りつくりと作入
 入れぬ限りましく小欵待は花見の我意の人のすけけを喜び病も
 おとりのむろや中り忠告して自ら配膳するに父母の女見が忠告ふ
 小栗を欵待をよ其意を知ると今日の危難を助けられ嬉しき修りに
 病もおとりの心もさびしくぬるよとましく小栗をよめて何と
 がる意お移入んとをのりらるるをけりほしうら照天姫の今小岳
 と改名して万長が家の婢女と愛を結ばれ世を忍び夫の小栗を環
 念の志を遂げんとて夏半月を送りしお今日の主の妻子をよと
 宝光院の虚空をへお宿せしお不図危難を遭ひ危なき南村宗丹お
 助けられて恙なく家へ還る恩人を信入るとおあくふいうる人
 をとあつち主万長おしくいう小岳今夜の客人とお海くこたならぬ
 恩人すけが御座るといふまじきおあつち馬あつちよく秣飼ひ

ぼろぼろと。それより別当を焚て浴に修りうす。細中りも云合
 け。慌忙奥の方へ入らば小菟が主の命なら。林の用意し。客人の駈
 おき。馬の傍へ行くと着る小不思議や。横山安秀が飼あぐら。は甚馬
 して小栗。鬼駈なら。大なる驚か。夢如とも。弁方。扱。今夜乃
 客人の我夫小栗。ありの。さう。び。何う故ありて。今其主の替り。や
 さ。あ。ても。此馬を。あ。の。の。東國。我夫。又。化。ありとも
 お。あ。の。の。に。今宵の客人を。と。下婢の奥へ。と。の
 叶。及。と。彼鬼駈。林。水。汲。火。焚
 け。奥。の。光景。と。窺。遥。の。琵琶の音。此家の
 女児。見。あ。と。お。今。様。声。正。夫。助。重。の。声
 音。あ。も。彷彿。あ。か。か。と。踏。世。を。思。ふ。を。も。ら。れ
 意。き。夫。と。人。と。始。奥。入。と。世。忽。ち。あ。ひ。く。を。中。今。鎌。倉
 殿。の。力。ひ。強。く。此。國。ま。ど。も。伏。し。あ。ら。ふ。勘。受。我。夫。の。その。乃
 上。を。明。ら。か。い。う。ろ。ろ。難。あ。遭。ん。づ。め。さ。め。れ。り。も。連。ん。づ。ら。互。あ。忍。心
 身。の。さ。う。を。知。て。る。あ。ん。悲。し。き。よ。さ。の。奈。何。を。宜。人。と。思。ま。ぬ。用。さ。ま
 想。ひ。屈。し。心。を。悩。ま。折。く。は。を。湯。も。よ。か。ん。あ。ん。し。ぎ。あ。ま。や。と
 娼。妓。あ。宗。丹。を。誘。り。浴。室。に。あ。る。照。天。の。あ。び。室。丹。を。あ。り。仰。け
 見。あ。が。れ。が。ま。か。ら。方。お。き。夫。な。れ。あ。る。袋。し。と。い。ん。と。と。れ。と。人。目。の。関
 を。憚。り。て。胸。の。苦。し。さ。の。ゆ。え。辟。さ。ん。中。う。も。な。く。落。る。涙。を。せ。ま。き
 め。く。糸。が。も。知。る。宗。丹。を。風呂。の。裡。より。小。菟。を。こ。ん。だ。破。垢。つ。ま。し
 衣。を。着。て。髪。の。様。と。乱。せ。が。瘦。瘠。は。消。瘦。し。女。の。れ。と。鄙。お。目。か。る。ね
 次。女。親。よ。い。う。ろ。ろ。人。の。零。落。て。知。る。賤。し。た。事。が。よ。る。と。い。と。あ。東。由。く



照天



小栗夕重

小栗浴室
照天
會還

尾見

小栗卷之八

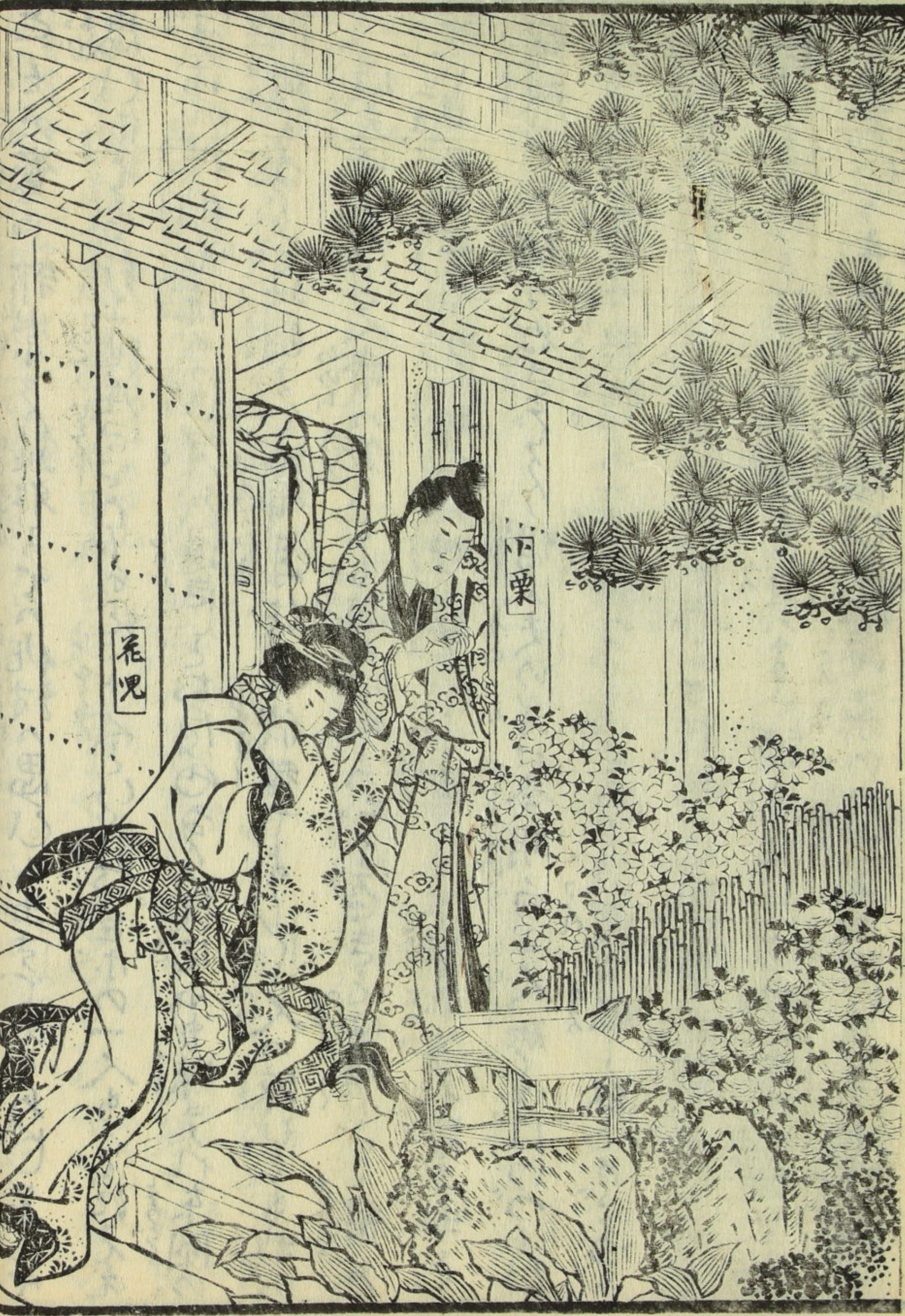
えつるをききて必す刃心成るるに此き結をばきせぬとて夫婦遠の
會らざるも治慰すべしと今宵忍びて身よじしと明白の岩指の夜乃
切を結るものと同をりて知れぬ情の結ひの多し成るる小栗の
さくばと立あがば娼妓の前は圍繞して侍らふまよ入るる。

第十四編

悪漢命と腹と青墓驛
忠臣主を救ふ赤坂原

此當時万長が女兒花兒の小栗の沐浴をて浴室は行らるる遊村やを
湯子多れと出た後何事を做てもあつとと蜜は浴室おのりくみの隙
よしか知らば着る小栗秋とらち物結ぶひてあがりながら光景は
中へ嫁くを何縁のやと可を竊めては人にとせよとや小栗小栗
と別は然ひの色を面は紅くしけりまけは立寄り原の一室に入らるる

又更で酒着をまし主夫婦たちかりの尚多くは食意なき程多く初更に
なりぬまばらぎも睡ふ就多ひ昼の勞を休了とと圍房裡小澆門入る
睡衾うち被せ寐さしけり食意は倍し女の渾身の外におもさるる
小栗の寂茶照天を漕つてそより其の多しと想ひ續まは美酒を飲
み肴を食ども味を甘んせんと人々種々待過がりのあつと
懶へてのりし今卧ふ入る人もまざるやおのれ一人睡衾打被
寐られど尚公の易んせと只願妻のいと女のみ想ひはげしく今一回
逢ふもが好念とれと案内あるは旅宿をいつく小妻の居るを
とも弁かたかくて心を痛め愁の涙は枕を濡し夢も結ぶてあがりつる小妻
更圍て人々熟睡志州とおぼしめて寂寥にたまひき小妻の柩を
あらしと忍びひかりも音のふあそはら怪しやな夜乗人の耳目を



驚馬して何としかき言語なく。只茫然とはなかりし。申のつゝ助重を
 形を改め言語を正し。いふ花見ぬ。奈何なる縁故をりて我臥下へ
 してせめふ言同もあてあふ。明日こそ笑め。今宵はと申。去りへ
 我柳下惠よ。あふ。いふ人の替めんことも憂。さう。此小を去るへ
 といふ。花見の面を揚女子の身れと。形く。此更思ふのり。扱と
 処こそあふ。体我心君をえ。より。難面も想ひ。ゆき。恋の閑沈や。
 身こそ苦。たれ。糸。恋のか。あ。明日と。候。今。命。改
 縮め。あ。恋。人の。傍。死。な。れ。せ。あ。て。の。り。と。そ。悟。せ。り。回。恋。を
 笑。い。あ。ひ。糸。と。急。迫。し。恋。は。助。重。の。何。と。回。恋。言。語。なく。ゆ。き。と。組。む
 さ。一。俯。き。を。幽。一。居。り。り。花。見。の。尚。も。さ。と。さ。う。回。恋。の。い。う。か
 とい。も。が。さ。か。助。重。か。ら。い。言。を。ら。某。今。の。が。て。あ。れ。と。初。維。と。き。よ。り
 親。の。許。嫁。せ。一。妻。も。あ。り。一。夫。一。婦。の。庶。人。の。常。い。う。て。二。人。の。妻。と。せ。ん
 此。小。の。事。を。并。て。此。の。ゆ。ゆ。し。あ。ひ。糸。と。笑。より。花。見。の。面。を。赤。せ。ま。さ。と。え
 る。あ。道。理。あ。ら。そ。の。み。形。偽。り。て。あ。ん。心。を。ほ。さ。る。と。ま。し。甲。夜。は
 室。で。下。婢。の。小。萩。と。親。く。物。遣。ひ。涙。は。咽。ひ。あ。と。さ。て。ま。さ。と。奴。水。が
 此。下。へ。忍。び。身。か。折。ぐ。小。臈。は。霞。の。星。影。よ。さ。と。く。に。誰。と。あ。弁。ね。と
 一。人。の。女。が。妻。戸。の。外。身。を。潜。め。は。い。と。て。裡。の。光。を。を。穿。つ。ふ。さ。ぬ。不。安。と
 お。り。ひ。躊。躇。ら。ち。其。影。を。さ。さ。り。付。ま。さ。て。あ。も。も。忍。入。り。物。遣。り
 こそ。相。ひ。あ。り。妻。戸。の。外。身。を。よ。し。は。規。ふ。処。を。お。ん。と。ま。ぐ。く。入。れ。ま。さ。と。
 ま。さ。と。は。ま。の。燈。架。の。小。袖。を。か。け。お。き。ま。ふ。と。今。宵。女。を。忍。び。て。信。じ。ひ
 め。ま。の。あ。ん。さ。れ。い。う。と。斯。る。ま。さ。り。を。せ。ん。欺。ま。あ。も。程。こ。の。あ。れ。女。の
 身。か。て。恥。ま。し。く。云。出。は。る。と。ら。げ。ま。さ。れ。何。面。目。に。存。命。と。か。糸。と。

西ノ巻ノ一

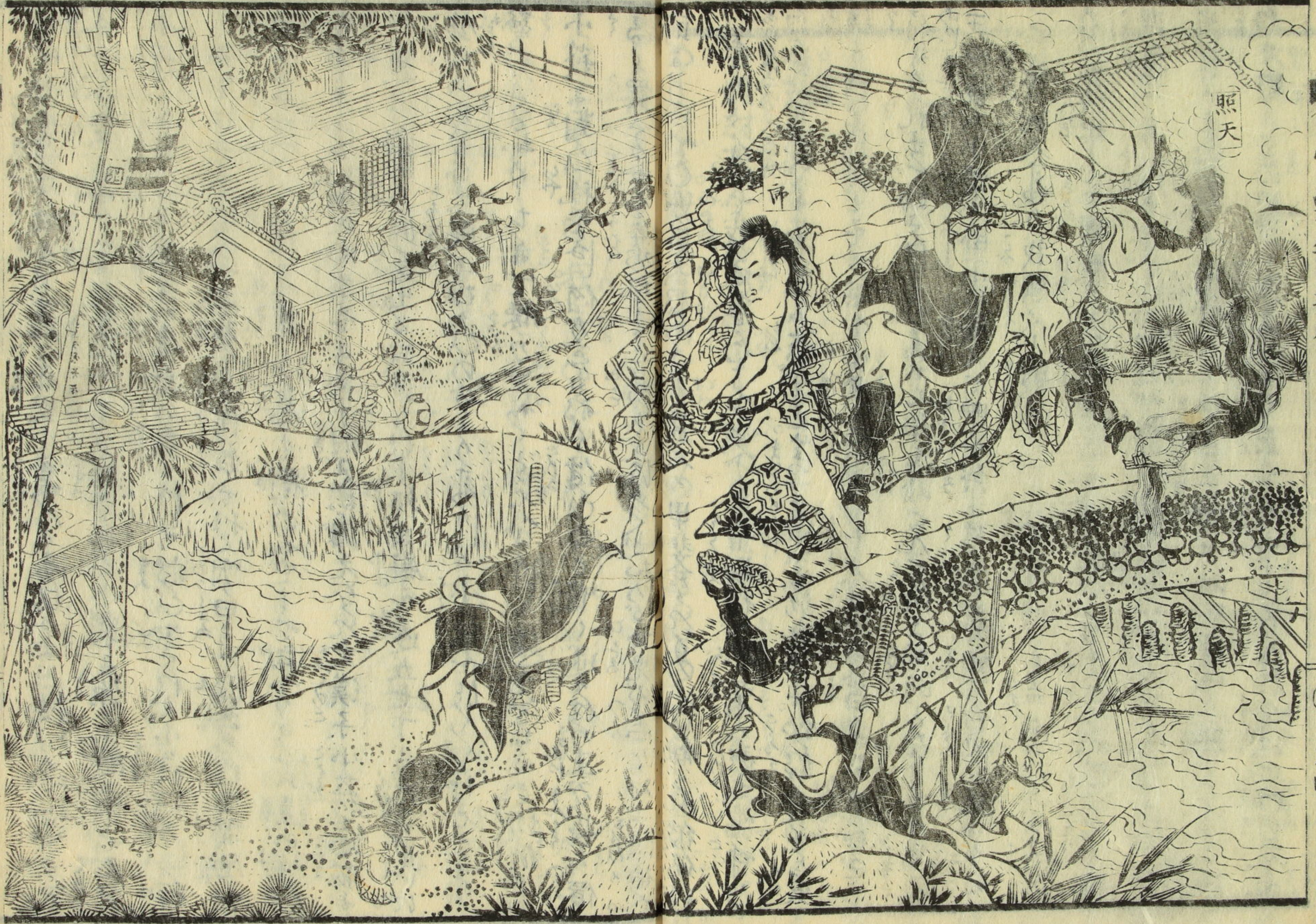
心は深く想ふら我子出さぬ思ふも此見は疎畧なるものありや
 とゆたまの露むりも知らざる神や佛は道でん世身小ぶたま
 りそのこと近きやとるゆゑ生膏の思はるや物学ひきよは公倦
 はひし病をひき出せるまも奴家も心をいれぬいふせんとあや
 かとさぬ醫藥のこを治療のこを頼し小病を癒ひせしは此界奉
 ちや二八の春情のこはひはははまきと屈はしるゆゑ此病の春りあり
 茶餌の功より鬱散の術を逆増ありとせえと終りの実もとと
 心のはまきしよの鬱散しきを暗さる女児が心のまよひの遠近あり
 伴へり今日も宝光院へ俱へたれ悪漢どもに生命を殆終る及し
 不図前へその助よりの危き心を助うあり生南村よつ女児が
 秘願しるるに主人の情せしむと正なれては人の心も怨不知類

あて過々れるる雨る小今夜先刺奴家刺し行んとて此処を
 紙燭の火影ささるる知れ移ど女の教をて娼妓のらちよけて
 のりと思ふよととる忽ち紙燭を消し知らぬさぬあて行んとせしが
 爾れり盗人の女中扮打忍あやと妻戸の外首はみくらちの
 光景を窺ふよ正しく我子のさぬならさすて意慕のかりせなく
 身へりとあふ射又一人の女子が忍びゆく多くと擲言のわをま
 小萩よのりはははの擲言のわをまこの圍の裡小入しは女児が
 此の妨ごとけひ行て避くど鬼角女児の手はくらく再びあひ
 耳より死んとは光景を窺ひも今より身も世もあはま
 此辨とくく及びんと照天の影をいつよ小萩よ今望へはる我が
 教よと斗しくほきとへ奴家が此下小居人あ妨もまらるる

今此所をば去るぞし宗丹ねも我女見も小萩がらん道埋成よろき
 ぶれてぶれとも心のまわくならねと紙門の外はあつてさる跡よ一人
 教え合し夢付言語もなかりし中ゆりて照天姫小栗よ對して云出
 ちあゆみ甲夜の月と湯殿かおしと殿見下し別進しまよあふふ
 如何ももして今一回いすまわらさるよとふりとおりのあははしく藤く
 すり家の製の厳小美婢の才と此と縁へ寄もあははしく事なら
 ずおをあらうの故さふうち志と前刺小忍びあかすお氣さる夫人
 足むめたなひも志を何なれ憂同小達あやんと易きふもあは
 ざしし母そのま裡お伴ひひましく憂恤その人あて理なくやまこえ
 りあゆみかことが才のう粗知のねそぞ人漏さして此候て過さんと
 させまを深き頼ありおさとの才おいとほしくまことめあれと尾川
 やと想ひのりまき宣らると主人とらひ且りまこと我才のうを和りおがら
 家制と破くよは科を免さる恩あればいふで辭とまてんき奴家か力
 お称ふことへ命お換くおとと回意中せお姑とまて人の親と已
 子の姪行とらと戒めてまうく不義を募らぬ人け誹謗や世のまこと
 思らねとあつあつねども義理ある我見が命と換く眷恋せしとら捨
 おきり死もさるねらふいふ悔あとも甲斐あはしとら女見が志
 人と今宵我家に宿りよは家且主とて侍らなり彼人の後を窺ふ
 大まかりな志氣あり爾とて女見がうおとも此意けあつらもはした
 只おとをそし氷くせんら做らぬ一此事成らば長と嘆れ今よ
 その才の眼をさし心のまわくまことと深く頼とまひし不骨あ
 身を以て好身もあらぬ客人は氷くせんら志ひもかけらんとさるあつら

大漢子声を荒らげ云へりわれら今日宝光院まで此家の女兒と酒を
呑んとあざりしは汝不意に出まり妨りて女兒を奪ちて白鼻を赤
させしり。我くわまりのまはれ旅人と偽り此家より宿り女兒を連行敢
らんとせんと甲夜より光景を空にひしに汝を奪ちて我く妨せしは因
負せ終つ小兒を欺りて我りの敵の樂酒我く飲ひてせんといふ目今
此夜もあはしく徒らもつもの風情なり。さひ付る階門の會はるは
おもひ舞一曲舞あて看せんとさう受け受れと聞ひしり小栗完示と
らち笑ひしともおはしき者うお賞察してさうせん。腰刀を抜きを
多勢をおもふた一人おまのこくおめづり切てまわれの大勢の中
五田討取んと秘術をそして戦へとも鬼神も欺く助を微如のた刀を
あしらす子浅傷重傷を負ねりめなり。追まひてる人とりりはしり
前よりこのひしは太極めきし盗人が甲斐なれりの初静くは彼何れ
の事あつんので我手あつてせんまてと踏物れ小栗の敵で嗚呼乃
白痴此刀受てく莫泉か去と生二文字お切りをいれりて受
流し透を討んとさうしを小栗息慄く打太刀を受留りて嘆むを
肩より乳まで切さげられさうく処を踏んで終つ兩断となりさう。叔又
主石長小栗が卧所の強うて睡を驚し耳をさして聞か白刃を接ゆる
この盗人の入りし我恩人と戦ふあつと騒ぎは、も声ありたて陣中の
のを呼起し下僕数多を引連れ夫婦めるとも走まわれの生残り
悪漢とも小栗が手なみを知りつ且大勢の来つとん叶のまはしや
とひらんお散りお逃失り万長夫婦は此可まあり熟くさう切
殺されしりの今日宝光院まで事と惹出しりられ順礼の終りあり

小太師
不圖
女主
新



照天

小太師

新

九

九

さて悪漢小萩をのりけ花見を春來人と志はつよとけはぐめうさうさ
今又小栗が勇よよんで再び花見助りぬと小栗母深く感謝して花見
小萩も尋ねるゆゑ花見の屏風の影りして眺み出されど小萩何方へ行
る所やはらぐ小栗へと小栗の心愕然とれ明白なる程多ければ獨胸を
悩ます一人の下僕走り自心も衝ぬ人ぞとて之くろく主の呼び
起しめあせ驚れ則ちを立止し耐えし何えなれば大漢子小萩と小萩も
つい抱き外の方に走出る状えうけし程は殿を逐五七丁も走つたに
旅人ぬれとは大漢子じうひの方より身りしが小萩をほくく打つるより
驚ろくおめちめて腰刀をぬくとえくろし大漢子をらこと切例し
小萩は對ひれをほし何方とも行く侍ひぬと喘く速くわが主万長と價
高く買取る女を春來れしと易くはあくとわが女見の悪はれし相惚人
急し搜索もせざり多し小栗の下僕が物語を笑心裡おもしろあやう
これい災宅小を郎が我を連ひ小出さねよ不意照天と遭ひしめ危急と
救ひしうらぐと微く心安堵する時や天明の頃母なりたれば万長の
よべありまゝ一封の訴状を家へ知縣の官府へ訴しうら忽ち下官は
昨夜の光景を一封の訴状を家へ知縣の官府へ訴しうら忽ち下官は
万長が許へ遣く斬殺しう盗人の屍を懸候さまと小萩も人形以て
搜索するとの田の小萩といふ白刃の強盗なれば此一件の事子細あく
涙みたり郎て小栗のよやくを還り照天が安否を知ると心裡よ念じ
るが主万長も別を告還去んとよをまひきとめてさうりさるる
某がはより出るとおめおめおめい人どろり既おあつたなるうへは
えんるなり女見ゆては花見屋下を眷慕し想ひ死ねるさうよし
妻が物語ゆて承りぬ我も夫婦子とて彼一人の今と死あめせ

けりやうり付らん足下の日光景を窺ふ所唯人をしてはゆるさずまじ
 さぞ跡見おぼしきゆりか凡人の望まざれとを思ふぬの取用の足
 さはが故なり。我富といふのあつねどまじれともゆりか今女兒を
 妻としてさふ終ひるが我財ける寶のかまひを残りなく譲り
 身をさへおぼしきおぼしきたらぬまこととを果しぬ人此奉養行ふ
 のぞく足下の上を粗ありね恨多しさん術もあれど子放小すよふ
 親心おひありげよはへり小栗熟くうち父小今万長かあつねお
 逆ら我身の上は知らうらなり。一さふ内通し宿志の妨せんゆま皇
 知らぬぬりなれど後も花見と妹脊の語らひせん我妻の想ひん
 処も公若しこの奈何しを宜らんとおぼし恨めて居りければの村小位
 さまみ出小栗よひうしきくさくのたねの前刺す小栗が氷人しく既ち

落ひるひいふ今外人の居るねとて辞すあつね正あつねれんあつねお
 小栗が行来ぬよかひもあつねや彼がゆり我もいふて麻器も存ぶと死
 一日二日のうちあつね必すあつねのむらふを易や此所はおつねを還
 可う候多くとあつね小栗と足下と夫婦なりと知れぬも夫とあ
 いらそ余亦ながら小栗がこつねを安堵させ置け止さしそのうち
 女見が意を称へんと夫婦交りかたけいいうかまれども還さぬ小栗も
 今ハ塗方なく。一日くこ止められぬらるる居りたる放下一頭却説
 遠裏美登小を卸を小栗が宝光院并詣ける付従者して行りし
 俄亦赤坂まで所用つてきき彼下使しゆき用のことと整々ねら速小
 寶光院へ参り。主人を尋ふ所知れぬ人みせけとも多し参詣の人
 かねがと知れぬと笑ひゆはよさう待てびぬと林よく酒肆

むんごう入まふゆりやと山をり酒肆旅店より紀年と容貌と
 をさひと尋ねれど曾て知事とゆふの小栗やう移り。明日また縁
 じやと藤の旅店に一宿しをれが夜半にり小紙門闌を旅人乃
 連たる人と物結り成すは昼不と虚空義堂の前中。青墓の宿の
 万長とやうんいふ者の女兒悪漢ホの為ふ悩まされを研馬おまのし
 ぬき人助け援ひさり世あ情のゆ人も有る様よと云ふ小左郎あやう
 こゝ平く主君助重とみ相遠のうほしと喜びは犯す彼旅人ハ
 女を救ひし小年何方へ行かぬと問ふ旅人のいふ其人を万長傳ひ
 去ぬと回意されはさるべきとまよりの直万長が許は往て途ゆく
 女を担ひしやう大漢子六七人を行遭り不守あり熱くは照天姫
 ぬてあり縁故を問ふと暇を牽してすなり漢子と刃殺し後者を
 逐散し照天を助け縁故を問ふ六浦とて夫が別れ旅浪々毒手あり
 祝喜の冥助およして蕪松の危難を脱れ瀬戸橋めて人買の手は渡り
 万長が許小賣いさされ多くの苦難を凌ぎ存生居らうし今夜も
 夫を春遊してこれが為忍びしゆれ形さる其折ら盗人のりて
 棄てしむれ此下まありぬと首より尾お空うて詳に物結れ美登
 小左郎これをやうら且に嘆れ且を怒りしとまづん姫の恙はれと
 急ぎ主君小栗を迎へ候りんとせし孰く思惟邂逅は還命は照天姫
 を若万長は取戻されは惜まらゆ。主君ハ勇知もに候りし大將
 かねばがて恙なく還めんとそれより姫を伴ひ三羽は還り小栗が困
 居の斤山里は忍び置主の還りを候よさるに音問ははれぬまりの

むんごう入まふゆりやと山をり酒肆旅店より紀年と容貌と
 をさひと尋ねれど曾て知事とゆふの小栗やう移り。明日また縁
 じやと藤の旅店に一宿しをれが夜半にり小紙門闌を旅人乃
 連たる人と物結り成すは昼不と虚空義堂の前中。青墓の宿の
 万長とやうんいふ者の女兒悪漢ホの為ふ悩まされを研馬おまのし
 ぬき人助け援ひさり世あ情のゆ人も有る様よと云ふ小左郎あやう
 こゝ平く主君助重とみ相遠のうほしと喜びは犯す彼旅人ハ
 女を救ひし小年何方へ行かぬと問ふ旅人のいふ其人を万長傳ひ
 去ぬと回意されはさるべきとまよりの直万長が許は往て途ゆく
 女を担ひしやう大漢子六七人を行遭り不守あり熱くは照天姫
 ぬてあり縁故を問ふと暇を牽してすなり漢子と刃殺し後者を
 逐散し照天を助け縁故を問ふ六浦とて夫が別れ旅浪々毒手あり
 祝喜の冥助およして蕪松の危難を脱れ瀬戸橋めて人買の手は渡り
 万長が許小賣いさされ多くの苦難を凌ぎ存生居らうし今夜も
 夫を春遊してこれが為忍びしゆれ形さる其折ら盗人のりて
 棄てしむれ此下まありぬと首より尾お空うて詳に物結れ美登
 小左郎これをやうら且に嘆れ且を怒りしとまづん姫の恙はれと
 急ぎ主君小栗を迎へ候りんとせし孰く思惟邂逅は還命は照天姫
 を若万長は取戻されは惜まらゆ。主君ハ勇知もに候りし大將
 かねばがて恙なく還めんとそれより姫を伴ひ三羽は還り小栗が困
 居の斤山里は忍び置主の還りを候よさるに音問ははれぬまりの

おぼつらなきふ主そまうしゅの近ちかひ小姓せうじ人と我われ回まわり想おもひ辛くるうと近ちか所の世よの間の
光景あけまゐ群ぐん盜蜂とうちゅう起おこす尋常よつねの人ひとといふとも荒あらくじく其心そのこころを免ゆるされ後ごがかる
斥山しやくざん陰いん小姫せうぎ一人ひとりおる又また念ねん何なにことうしてき形かたちんと心安やすみたがまじくそれぞ
形かたちもだかしく人を雇かふと万長まんぢやうが件けんかかんで小栗せうりに書かき問とひ送またり
されど万長まんぢやうも偏ひとへんこと恐怖おそそて照天てうてんのまる露つゆをうりも写あらわすことまじ
速すみに還かへりあまんと而しかに已いまひかたき。

小栗外傳卷之八

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

